

2023年度 海洋教育研究会 要旨集

2023.7.28 (金) 10:00 - 16:45



はじめに

本日、日本財団および笹川平和財団海洋政策研究所主催による「2023年度 海洋教育研究会」開催にあたり、ご協力いただいた皆様方ならびにご発表の皆さま、そして本会場およびオンラインでご参加の皆さまにこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

海洋教育研究会は、海洋教育パイオニアスクールプログラム採択校による活動報告をもとに、各校の活動の目的や方法、課題等についての議論や意見交換を通して、参加者に海洋教育の実践についてさらに理解を深めていただくことを目的としています。そして海洋教育パイオニアスクールプログラム参加校以外の学校や教育関係者のみなさまにも、海洋教育の多様な実践を知っていただく機会になればと考えております。本会は、海洋教育の実践や研究の推進、教職員と研究者の相互のネットワークの構築、海洋教育への継続的な取り組みの普及と促進を目的として、2019年度より始まりました。その後はコロナの影響もあり、昨年度までオンライン開催が続いておりましたが、今年度は日本を代表する水族館の一つである海遊館の多大なるご協力をいただき、ハイブリッドで開催できる運びとなりました。館長の村上寛之様はじめとするスタッフのみなさまにも深く感謝申し上げます。

本日第Ⅰ部では、社会教育施設との連携をテーマに、高知県は柏島より、黒潮実感センター センター長の神田優さん、そして、海遊館の飼育展示部普及交流チームマネージャーの川邊由里子さん、そして、長年福岡県の海の中道で館長を務められ、現在は海と博物館研究所所長の高田浩二さんより、話題提供をしていただきます。地域資源をどのように発掘し学びへ活かすことができるのか、それぞれ多彩なご経験とその経験から得られた知見を共有いただきます。また、第Ⅱ部では、北は北海道羅臼町から南は沖縄県豊見城市まで、校種を越えて、幅広くご発表していただきます。地域性を活かした、また発達段階に応じた学びが共有され、より深い学びにつながっていくことを期待しております。

本日の研究会が、参加者の皆様にとって有意義なものとなり、海の問題を「自分事」として捉え、海にかかわる楽しさや新たな探究心を持ち続けて、今後も海洋教育に取り組んでくださることを祈念して、開会の挨拶とさせていただきます。

公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所
所長 阪口 秀



プログラム

10:00- 開会挨拶 笹川平和財団 海洋政策研究所 所長 阪口 秀
ご挨拶 海遊館 館長 村上 寛之 氏

【第Ⅰ部】 1

10:10- 話題提供(1) NPO法人 黒潮実感センター センター長 神田 優 氏

10:30- 話題提供(2) 海遊館 飼育展示部 普及交流チーム マネージャー 川邊 由里子 氏

10:50- 話題提供(3) 海と博物館研究所 所長 高田 浩二 氏

11:10- 休憩

11:20- パネルディスカッション

11:50- 昼食休憩・写真撮影（オンライン参加者対象）

【第Ⅱ部】（※発表 15-20 分、質疑応答 3 分、場面転換等 2 分） 2

12:50- 発表報告(1)（オンライン）

海洋教育における児童生徒交流 ～竹富町（沖縄県）と羅臼町（北海道）の実践紹介..... 3

藤吉 桂子 氏（羅臼町立春松小学校 校長）

13:10- 発表報告(2)

海洋教育の導入から、地域とつながる教科等横断的な探究活動へ 4

鈴木 祐二 氏（北海道標津高等学校 教務部 主任）

13:30- 発表報告(3)

洋上風力発電の漁礁効果を素材として中 3 理科の深い学びに繋げる 5

片石 一成 氏（学校法人 青森山田学園 青森山田中学校 講師・総合教育アドバイザー）

13:50- 発表報告(4)

『海と生きる』気仙沼の子供を育成する「海と生きる探究活動」

- 「海と生きる探究活動」で本校が目指すもの - 6

小野寺 裕史 氏（気仙沼市立鹿折小学校 校長）

発表報告(5)

『海と生きる』気仙沼の子供を育成する「海と生きる探究活動」

- 「海と生きる」気仙沼の子供を育成する海洋教育の実践について - 7

齋藤 佳奈 氏（気仙沼市立鹿折小学校 教諭・海洋教育担当）

14:15- 休憩

- 14:25- 発表報告(6)
岐阜市における海洋教育の実践について 8
 鈴木 大介 氏 (岐阜市教育委員会 学校指導課 主査)
- 14:45- 発表報告(7)
ふるさと大浦を学びの場とする「大浦未来学」の実践..... 9
 中川 靖彦 氏 (舞鶴市立大浦小学校 校長)
- 発表報告(8)
「ふるさと」を学びの場とする大浦未来学と SDG s
～地域に学び、つながり、誇りを持てる子ども達の姿をめざして～ 10
 小酒 未央 氏 (舞鶴市立大浦小学校 教諭)
 加藤 彩香 氏 (舞鶴市立大浦小学校 教諭)
- 15:10- 発表報告(9)
パイオニアスクールプログラムを活用した地域に根ざす海洋教育 11
 石原 慎 氏 (阪南市教育委員会 事務局生涯学習部 学校教育課 課長)
 林 江美 氏 (阪南市教育委員会 事務局生涯学習部 学校教育課 指導主事)
- 15:35- 発表報告(10)
地域の宝ラムサール条約指定の「漫湖」を活かした海洋教育
～故郷の「漫湖」を知り、愛し、持続させていくためにできることを考え実行する活動～ .. 12
 松原 康平 氏 (豊見城市立とよみ小学校 教諭・海洋教育担当)
 赤嶺 智郎 氏 (豊見城市立とよみ小学校 校長)
- 16:00- 全体ディスカッション
- 16:20- 総評 笹川平和財団 海洋政策研究所 特別研究員(元文部科学省 視学官) 日置 光久
- 16:35- 閉会挨拶 日本財団 海洋事業部 部長 木田 悟史
- 16:45 終了・写真撮影 (現地参加者対象)

話題提供者 紹介



神田 優（NPO法人 黒潮実感センター センター長）

1966年 高知市生まれ。東京大学大学院農学系研究科水産学専攻博士課程修了。農学博士。専門は魚類生態学、エコツーリズム、里海論。高知大学大学院客員准教授。学生時代は釣りと高知県柏島および沖縄県座間味島でのダイビングガイドで生計を立てつつ学問に励む。潜水時間7000時間以上。四国の西南端、高知県大月町柏島に“島が丸ごと博物館”という構想の元、海のフィールド・ミュージアムを作ろうと1998年に単身柏島に移住。2002年 NPO法人黒潮実感センター設立。柏島にて持続可能な「里海」づくりに挑戦している。

➤ kuroshio.asia



川邊 由里子（海遊館 飼育展示部 普及交流チーム マネージャー）

1967年 鎌倉市生まれ奈良育ち。東京水産大学（現東京海洋大）に在学中、ラッコについて学ぶため1年間休学し、カリフォルニア州Montereyの大学に留学、Monterey Bay Aquariumのラッコ野生復帰プログラムにボランティア参加。1991年 海遊館に入社。ラッコや海獣類の飼育、スクール等教育普及活動に従事。10年間の総務チーム勤務を経て、2018年7月から飼育展示部普及交流チーム。現在は、時代に合わせた水族館の普及啓発活動を模索しながら、環境やSDGsに関連した展示や企画を進行中。特に大阪湾とそこに暮らす生き物の普及啓発に力を入れている。

➤ kaiyukan.com



高田浩二（海と博物館研究所 所長）

1976年 東海大学を卒業し大分マリンパレス入社、民営水族館初の教育普及担当学芸員に。1988年 マリンワールド海の中道設立に携わる。1998年 ISDN回線を用い遠隔授業開始。2004年 国立民族学博物館客員教授、マリンワールド海の中道館長就任。2005年「水族館における海洋教育の役割の研究」で博士号取得。2007年 文部科学省博物館法改正委員、2008年同省中央教育審議会委員。2015年 福山大学生命工学部教授、2019年「海と博物館研究所」設立。2019年にも文化庁博物館部会員を歴任して博物館法改正に関わり「[博物館としての動物園水族館の在り方](#)」等を執筆。趣味は水族館・博物館巡りで、半分は実益を兼ねる。

➤ facebook.com/koji.takada.984

発表校・地域



海洋教育における児童生徒交流 ～竹富町（沖縄県）と羅臼町（北海道）の実践紹介～

藤吉 桂子
(羅臼町立春松小学校)

本校は、世界自然遺産に登録された知床半島に立地し、海を含め豊かな自然に囲まれた環境のもと教育活動を展開している。特に、「知床学（海洋教育）」を中心として、総合的な学習の時間や生活科と関連付けた教科横断的な指導計画に基づき、豊かな自然、動植物、水産業、海を活用した観光など郷土の特性を学ぶ教育活動を行うことで、ふるさとの誇りと愛着を育み、郷土の発展に役立つ社会人となるための資質・能力を育むことを目指し学習活動を実施している。

1 本校での知床学（海洋教育）の主な取組

これまで「総合的な学習の時間」を中心に取り組んできた「知床学」の主な学習（豊かな自然、動植物、水産業、海を活用した観光など郷土の特性を学ぶ）全体計画を見直し、海洋教育に関わる取組を中心に海に携わる外部講師による学習支援や体験学習の充実を図り「知床学（海洋教育）」として取り組んでいる。

2 竹富町（沖縄県）と羅臼町（北海道）の交流学習

本校では、令和3年度より竹富町立上原小学校（沖縄県西

表島）と ICT を活用し海洋教育を中心とした地域学習交流に取り組んでいる。羅臼町と竹富町は、日本の端から端といってもよいほど遠く離れているが、共通している点も多い。具体的には、

- ・世界自然遺産の地域で学び ESD を推進している学校である、海洋教育を推進している
- ・特色ある地域学習『知床学（羅臼町）』『結ぬ海学（竹富町）』に取り組んでいる。

今年1月、両小学校での交流を機に、「パイオニアスクールプログラム沖縄交流会」として羅臼町内小中学校の代表児童生徒及び教育関係者が沖縄県西表島を訪問し、竹富町内の児童生徒とともに、それぞれの地域において実践している「海洋教育」に関する学びを交流した。地域での学びを互いに交流することで地域の良さを理解するなど、貴重な学びの場となっていた。

3 まちづくり提案会～学びを行動へ～

これまでの学びをもとに、自分たちができることを考え、地域の人たちに提案する「まちづくり提案会」を開催した。参加者から多くの意見や感想をいただき児童の行動を後押しする原動力となった。



写真1：羅臼町交流団と上原小学校、西表小中学校、船浦中学校の児童生徒

海洋教育の導入から、地域とつながる教科等横断的な探究活動へ

鈴木 祐二

(北海道標津高等学校)

1 本校の海洋教育（実践報告）

本校は、根室海峡に面した海辺の街で、世界自然遺産知床への入り口にあたる生徒数 71 名、教職員数 15 名の小規模郡部校である。また、海洋教育の単元開発には、2019 年度より取り組み（下表）、教科教育から ICT の導入、探究活動への発展、日本遺産の教材化を行なっている。



写真 1：干潟の生態学

2 海洋教育からの成果

海洋教育の成果は、「学習の広がり」と「地域文化とのつながり」の 2 点である。海洋教育を体験した生徒は、海洋リテラシーの向上が明らかであった。教科教育では得られない専門知識の深化や海洋環境意識の向上が図られた。特に、海洋ゴミ問題などをテーマにした単元では、海に対する思いやり、責任感を感じながら活動する生徒が多くなった。また、日本遺産「鮭の聖地の物語」を教育の軸に据えることで、地域文化を通して教科等横断的な活動に広がり、探究活動へつながってきた。本校の海洋教育は、標津サーモン科学館や標津漁協、北海道大学等の地域の関係機関とつながることで多様な成果に結びついた。



3 見えてきた課題

現状、海洋教育という分野が多く「〇〇教育」に埋もれている。海洋教育を浸透するためには、海洋教育を持続的に展開することや教科等横断的に実施することが重要である。さらに、教科や特別活動の中に海洋教育を探究活動として取り入れることやユネスコ活動の一環として取り組むことが期待される。

現実的な課題としては、職員の多忙感からくる「消極的な取り組み」や海洋教育の「ICT 化への抵抗感」、さらに「地域とつながる人作り」等が挙げられる。

4 現状と今後に向けて

海洋教育の実態とその対応は、どうなっているのか。現在、課題の全てに対応できているわけではないが、「消極的な取り組み」への対応には、海洋教育の単元に教職員の参加を積極的に促すことが効果的（写真 1）であり、さらに教職員の海洋リテラシーが向上し、海洋教育への理解につながる。本校では、教員に限らず、事務職員も海洋教育に参加することもあり、学校全体で海洋教育を共有できた。

ネット環境の整備により ICT で効果をあげた単元が、双方向型実習で行った中学生とのホタテ解剖学習とオンライン博物館学習である。ネット環境のおかげで、リアルタイムでの解剖を提供できたことや遠隔地でありながら学芸員の解説で博物館の展示を見学し、さらにバックヤードまで見ることができた。しかし、ネット環境では、伝えられないことも多く感じる。例えば、干潟の生態学を現在ではオンラインで対応も可能ではあるが、干潟の匂い・感触が伝わらない。海洋教育を推進するにあたって、実物教育がベースでなければならないと強く感じる。ここに海洋教育の「ICT 化への抵抗感」を感じるのである。

最後に「地域とつながる人作り」である。若手の多い職場では、ここがネックになる。しかし、コミュニティースクールの人材を活用することや、教職員が作り上げたつながりを継承すること、町役場の高校との連携担当を活用することで、この課題は解消できる。つながりをつなげることが大切である。

これからも本校では、海洋教育を推進し、「鮭の聖地の物語」を紡ぐ単元開発に尽力していく。

2019	高校生物における海洋教育の導入と環境学習からのアプローチ
2020	高校生物から教科横断的な海洋教育の導入の研究と環境学習からのアプローチ
2021	教科横断的な ESD のための海洋教育の展開と ICT 導入に関する研究
2022	総合的な探究の時間における教科横断的な海洋教育の取り組みと ICT を活用した海洋教育の推進
2023	体験活動を探究力につなげるグローバルな海洋教育の開発と地域への広げる海洋環境活動

洋上風力発電の漁礁効果を素材として中3理科の深い学びにつなげる

片石 一成

(学校法人 青森山田学園 青森山田中学校)

1、実践報告

本校では2021年度より中3理科の学習で、生態系の学習と人間生活と科学に関する単元学習で地元の海の環境を素材とし、海洋への関心を高め、資源の大切さを考える教材の開発を行ってきた。21年度はナマコ栽培漁業と海洋ごみの問題を。22年度は棘皮動物を中心に小さな生態系を水槽で再現を。今年度は海洋風力発電の漁礁効果と生態系を実地観察や飼育観察実験で体験を通して海洋生物に親しみ、海洋資源の保全の重要性や人間との共生について学習を深める学習を進めてきた。



写真1：潮だまりで観察

今年度は青森県の陸奥湾で海洋風力発電を推進している(株)日本風力開発顧問の東京海洋大学中泉先生から漁礁効果について出前授業をしていただき、浅虫海岸の生物採集を行いました。9月には風力開発の沖合での研究施設を漁船で実際に確認し、水槽で漁礁やアマモなどの生態系を作って検証を行う予定である。

2、実践してみてよかったこと

青森県水産試験場、青森県営浅虫水族館、洋上風力発電など専門家の話や、実際に生物に触れながら環境を調べ、実感的に学ぶことが出来た。そこから海の生態系を身近なものとして捉え、海洋資源の保全に自分たちの行動も関係していることを対話的や学びを通して考えることが出来た。

3、実践する上での課題

海洋生物の生態系づくりでは、関係が良くわからず、ヒトデやクラゲなどは捕食されてしまい、生物が偏ること。ナマコなどは餌の関りで飼育観察が難しい。今年の漁礁効果と環境の繋がりでは小型の魚が極めて手に入りにくい。などの海洋生物の飼育環境については、手探りでやっているため日々課題が生じる。



写真1：漁礁効果の出前講座

関心の温度差が生徒にあり、関心が長続きしない生徒が月日の経過とともに増えていく。

生態系の保全など海洋資源の大切さには考えが向くものの、発信していこうとしたり、自分たちで保全のために出来ることを考えるまでに気持ちが高まっていけないこと。

4、課題解決のために解決しようとしたこと

飼育環境については、水槽を扱う業者の方や水産試験場の先生、大学の先生、浅虫水族館の飼育員の方などとにかく教えていただいた。zoom を使って生徒自身に水族館の職員の方に質問することで一程度は解決していった。小型の魚はまだ解決できないでいます。関心の低下は、テーマを決めてグループで調べさせる活動を行い、新聞づくりを行うなどした。発信に至る物は検討中である。

『海と生きる』 気仙沼の子供を育成する「海と生きる探究活動」

- 「海と生きる探究活動」で本校が目指すもの -

小野寺 裕史

(気仙沼市立鹿折小学校)

気仙沼市は、震災復興と魅力あふれる気仙沼にしていこうという思いを込めて「海と生きる」という言葉をキャッチフレーズとして掲げた。その理念のもとに、気仙沼市の教育は、震災からの復興と、予測困難な未来への持続可能な社会と人への成長を目指す「海と生きる」気仙沼で生きる子供たちに、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をより良いものにしていくのかという目的を自ら考え出し、その実現に向けて深く考え、実践していく資質・能力を育む教育を目指している。

本校では、学校教育においてそれらを育成していくためには、教科領域を融合・往還させ、地球規模で起きている問題について、自分とのつながりを通してより探究的に学ぶための特別の領域として、3 学年以上に「海と生きる探究活動」を特設し、学習を進めてきた。また、今回の実践発表にあるように、海洋教育については、1 年生から取り組んでおり、海洋リテラシーの育成は全学年を通じて行っている。具体的には、海と生きる「地域」、「環境」、「産業」、「未来・自分」という大単元テーマを設け、気仙沼の「海と生きる」姿を多様な視点から見つめ、体験・調査し、深く思考し、行動化につなげるカリキュラム構成としている。

このカリキュラムにより、児童の探究的な学びの方向性や内容がより自分事となり、本校として目指している「自分の生き方」「地域の在り方」につながる学びに近づいている。子供自身がプロジェクト提案を行い、地域を巻き込みながら学校教育全体で社会と未来に開かれた探究を進めることができる実践につながっていると感じる。

こうした取組のなかで、課題となるのは教師の探究学習構想力である。様々な体験活動や外部人材を活用した授業を取り入れることは、一見すると見栄えがよいが、その一つ一つが大きな単元の流れの中で価値あるものとしてつながりをもたなければならない。陥りがちなのは、体験活動や外部講師を招いた授業がイベント化してしまうことであり、教師自身の授業構想力が重要となる。

本校では、教師の授業構想力を育て、児童にとって価値ある探究学習にするために、前年度に行ったことをそのまま年間計画とすることのないように、たとえ設定するゴールが同じであっても、児童の実態や地域・学校の状況に応じて年度当初に新たに探究学習の中で行う体験活動や人材の活用を見直しするようにし、必要であれば年度途中でも変更するようにしている。また、外部人材を活用する際には、児童に何を学ばせたかという授業のコンセプトを明確にし、打合せを十分に行うことで外部人材と共有し、明確な意図をもって外部人材を活用することを心掛けている。このようにして、探究的な学びとしてのストーリーを創りあげていくプロセス自体が、児童の主體的で深い学びを生み出すための教師個々人として、教師集団としての力量を高め、教材発掘と有効活用、単元と授業の改善にしっかりとつながっていくものと考えている。



写真 1：全国海の学び発表会で発表する子供たち

『海と生きる』 気仙沼の子供を育成する「海と生きる探究活動」 - 「海と生きる」 気仙沼の子供を育成する海洋教育の実践について -

齋藤 佳奈

(気仙沼市立鹿折小学校)

昨年度、2年生の生活科「生きもの なかよし 大作せん」で海洋教育を取り入れた実践を行った。児童は、1年生の生活科で海と触れ合う活動を行ってきたので、2年生では、1年生の学習を生かし、海の生き物について分かったことを1年生に紹介しようという課題を設定し、森は海の恋人運動の畠山さんが主催するNPO法人が運営する「森里海研究所」に行き、湾や浜辺にいる生物を調べる計画を設定した。児童は、海の生き物に詳しい畠山さん達から話を聞いたり、干潟やタッチプールで海の生き物と触れ合ったりする活動を行うことを通して、積極的に質問をしたり、海の生き物を夢中で探したりする姿が見られた。(写真2)

こうした実践を通して、意識調査の結果では、海の生き物に詳しくなったと実感できた児童が9割近くにも増えた。また、休み時間も進んでタブレットにまとめをしたり、図鑑で調べたりと、授業以外でも意欲的に生き物と関わろうとする児童が見られた。さらに、変容が見られたのは児童だけではなく、保護者の海に対する意識からも変容が見られた。震災を経験し、海へ行くことに抵抗があった家庭も、校外学習へ引率したことをきっかけに「やっぱり海って楽しい!」「また海に遊びに行きたい」等の前向きな感想が寄せられ、実際に休日に釣りをしに行ったり海で遊んだりする等、海と関わろうとする家庭が増えた。

低学年の教育課程に海洋教育を取り入れることで、本校が学校全体で取り組んでいる海洋リテラシーの育成にもつながると考え、生活科の授業に海洋教育を取り入れた。しかし、実践を重ねると、教師自身の意識が海洋教育を実践することに傾き過ぎ、本来子供たちに学ばせなければならない生活科のねらいから離れた単元の流れになってしまうことがあった。

この反省を踏まえ、本校では、主に2つの取組を行った。1つは、生活科のねらいを意識し、どこの単元で海洋教育を取り入れたほうが効果的か、海洋リテラシーと照らし合わせながら年間指導計画やデザインシートの見直しを行ったことである。2つ目は、校内研修を行い、校内研究の成果と課題の共有をし、次年度の担任へ引き継ぎを行ったことである。特に、2つ目では、現地への移動に係る時間と学習効果、活動内容と学年の発達段階等を考慮するべきという反省から、活動を絞り、活動後の調べ学習やまとめの時間を十分に設定することができるようにした。

2年生は、森里海研究所の代わりに、親子で岩井崎(磯遊び)での活動(写真3)を行うこととし、他の学年の探究の中で森里海研究所を活用することとした。磯遊び活動後は、見つけた生き物を図鑑で調べて記録したり、図画工作科「どうぶつさんと いっしょに」で「海の生き物と自分」の絵を描いたりするなど、様々な表現方法でまとめ、紹介することができた。

こうした児童の実態に即した単元構成の見直しは、生活科本来のねらいの達成につながると同時に、海に親しみをもつことや海の仕組みを知ることなどの海洋リテラシーの育成にも効果的につながると考える。また、海洋リテラシーの発達段階に応じた系統を学校全体でみることにより、学年間の指導のつながりがより明確になり、本校の「海と生きる探究活動」が子供たちの力を伸ばすよりよい学びとなると感じている。



写真2：講師の先生の話で釘付けで聞く子供たち



写真3：保護者と海と触れ合う活動を楽しむ様子

岐阜市における海洋教育の実践について

鈴木 大介

(岐阜市教育委員会 学校指導課)

1. 岐阜市における海洋教育の推進のための指定校の設置

令和2年4月1日より、特別の教育課程の実施として海洋教育を推進。市内の小中学校2校（長良小学校、長良中学校）を指定して開始。令和5年度で指定を終了予定。

将来の地域社会の担い手である子どもたちが、生命の源である海を起点に、より幅広く多様な視点から地域内外の環境を捉え、探究する力を育むため、小中学校において生活科や総合的な学習を中心に、社会科、理科などの一部の時間に替えて海洋教育の時間を設ける。これまで実施してきた河川を主な活動フィールドとした環境教育を更に発展・充実させ、「森・川・海」の繋がり、あるいは、水や生命の尊い循環を意識した学習や体験活動を行う。長良小学校、長良中学校ともに、海洋を意識した学習を実践している。

2. 長良小学校・長良中学校の具体的な年間実施単元内容

□小学校

【1年生】天神川での生き物見つけ、図工と関わらせて、

川の生き物たちの様子を作品として制作・校内に展示。

【2年生】岡口谷で生き物見つけ。長良川中流での生き物見つけ。

【3年生】長良川中流の生き物調査・水質調査。

□長良川環境レンジャーの担当者から話を聞く。

【4年生】長良川下流の調査活動。「長良川河口堰」へと赴き、現地での水質調査。

【5年生】「清流長良川あゆパーク」へと赴き、長良川上流における水質調査・講師からの講話。

【6年生】SDGsと関わらせた海洋問題に関する基礎的な学習。

南知多ビーチランドに赴き、海洋ゴミ問題についてとゴミ分別体験・飼育員の方の講話。

□中学校

【1年生】「わたしたちの長良川」：長良川に関わって動いている人たち

【2年生】「山から海へとつながる長良川」：他市や他県の「山・川・海」のつながりを学ぶ。

(沖縄県・滋賀県・静岡県など)

【3年生】「未来につながる長良川」：できることや実行する大切さについて考え、まとめを行う。

3. 実践の成果 (○) と課題 (△)

○海洋教育の系統的なカリキュラムが作成できている。指定校の枠が無くなっても継続している。

○従来、体験学習で留まってしまう学習を、理論と実践をつないだ「海洋教育」として実践できている。

○本実践の保護者の満足度も高く、児童生徒だけでなく大人へのアプローチもできている。

△コロナ禍で計画通りできておらず、中学校においては変更が多くあり、カリキュラムが不安定。

△一定の広がりがあるものの、市内への広がりには限定的で、海洋と河川をつなぐ発想はいまだに弱い。



図表 1
海でゴミを回収する児童

ふるさと大浦を学びの場とする「大浦未来学」の実践

中川 靖彦

(舞鶴市立大浦小学校)

1 はじめに

舞鶴市立大浦小学校は、若狭湾に面した大浦半島全域を校区とする児童数 49 名の小規模校であり、学校教育に対する保護者や地域の人々の関心と期待は高く、児童の学びに対する支援は分厚い。校区では美しく豊かな海を活かした定置網漁や牡蠣養殖等の漁業が盛んである。また、白砂青松の砂浜での海水浴、平和への願いを語り継ぐ引揚棧橋や舞鶴引揚記念館といった観光資源も豊富である。一方、少子高齢化や過疎化の進行は地域全体の大きな課題となっており、地域社会の持続可能性への危機感は急速に高まっている。

2 大浦未来学の創設

このような中、本校では令和 3 年度より総合的な学習の時間を「大浦未来学」と総称し、「ふるさと大浦を学びの場」とする課題解決型学習の充実に向けて取組を開始した。実施にあたっては、①校区の漁業関係者はもとより、地域に生きる人々の願いや仕事から学ぶこと、②大学や高専等の高等教育機関の専門性や学術性に学ぶこと、③これからの社会の創り手として SDGs の視点から未来志向で学ぶことをコンセプトとして、体験的で探究的な教育実践を展開することとした。

3 大浦未来学における海洋教育実践

本校では舞鶴湾の沖合 10km に浮かぶ冠島（国の天然記念物）で行われる大漁祈願の祭礼「雄島参り」に 6 年生児童が参加し、ふるさと大浦の一人としての自覚と誇りをはぐくむ伝統となっている。また、令和 3 年度からは、5 年生が野原漁港で「干物づくり体験」と「漂着マイクロプラスチック回収体験」を行うことを新たな学校行事として位置づけた。



5 年生干物づくり体験

大浦未来学としては、SDGs をキーワードに学級探究形式を基本に学習するため、海洋教育に特化した働きかけはしていないものの、児童は地域の特性から海岸の漂着ごみの問題等には注目しやすく、「14：海の豊かさを守ろう」を切り口に探究を始めた学年も多かった。その後、次第に海とともに生きる地域の一人としての意識が高まると、「11：住み続けられるまちづくりを」や「12：つくる責任 つかう責任」の実現に向けた探究へと視野が広がってきた。その結果、令和 4 年度の 5 年生は、漂着ごみを再利用し楽器にすることで持続可能な地域づくりを発信する「未来学コンサート」の学びへと深化させ、6 年生は、地元の高産物の魅力をいかした「大浦定食」を提案・発信し、過疎が進む地域の人口増につなげる学びへと深化させた。

4 成果と今後

海とともにある「ふるさと大浦」を懸命に思う子どもたちの探究の成果は、保護者・地域の人々の心を動かし、本年 1 月には舞鶴市政記念館ホールで「大浦未来学みんなの参観日」を開催し、広く市民の皆様へ学習成果を公開・発信するに至った。本実践研究の最大の成果は、探究活動をとおして「ふるさと大浦が子どもたちの誇りとなり、そこに生きる人々が子どもたちの憧れになった」ことである。今後もふるさと大浦の子どもたちは、海に生きる人々とともに、持続可能な未来の創り手として学びを深めていくことであろう。

「ふるさと」を学びの場とする大浦未来学と SDGs ～地域に学び、つながり、誇りを持てる子ども達の姿をめざして～

小酒 未央・加藤 彩香
(舞鶴市立大浦小学校)

1 はじめに

本校の総合的な学習の時間「大浦未来学」では、豊かな体験活動とアウトプットする力を大切に、ふるさと大浦を学びの場とする課題解決型学習を積極的に推進している。本報では、令和4年度の5年生および6年生の実践を中心に、美しく豊かな海とそこに生きる人々に学ぶ子ども達の姿について紹介する。

2 5年生「つながろう、伝えよう～住みやすい大浦を目指して～」

5年生では、課題設定の段階で地域でのインタビューを行った。地域を歩き、そこに生きる人々の声を聞く調査活動を通して、ふるさと大浦を愛する人々の思いや願いに気付くことができた。自分達の考えに地域の人々の思いが加味されることで、子ども達の「解決したい」という課題意識と探究心を高めることができた。そのうえでSDGs「11:住み続けられるまちづくりを」を主題に設定し、海岸のごみ拾いを行い、回収したごみや自然資源を活用した楽器づくり等を行った。そして、製作した楽器を活用した「未来学コンサート」を構成し、ふるさと大浦への思いを力強く発信した。

3 6年生「そうだ、大浦へ行こう！」

6年生では、地域についての情報を収集・分析する中で、「人口減少」の問題に着目し、豊かな自然の恵みあふれる大浦ならではの魅力を発信し、まずは地域へ足を運んでくれる人を増やそうと考えた。そのためには地域外の人々への発信力が重要になると考え、全校児童や保護者を巻き込んだ行事の企画・運営をとおしてアウトプットする力を次第に高めていった。また、発信するコンテンツは、大浦の海の恵みである新鮮な魚や岩牡蠣、わかめ等を組み合わせた「大浦定食」を提案することにした。子ども達は、繰り返し地元の漁業・農業関係者の方々と意見を交わし、企画をブラッシュアップし、発信力を高めようと試行錯誤する中で、ふるさと大浦の人々とのつながりを深め、ふるさとを誇りに思う子ども達へとたくましく成長していった。

4 大浦未来学の発信

大浦未来学の学びを一般の方々に広く公開する行事「大浦未来学みんなの参観日」では、各学年が探究した1年間の学習成果をステージとブースで発表した。課題解決型の学びをとおして、子ども達が本気で考え、取り組んできた探究の足跡を大浦地域内外の多くの人々に発信し、多様な意見や感想をもらったことで、子ども達は達成感を味わうとともに、未来の創り手としての大きな自信を得ることができた。

5 おわりに

子ども達は、これまで様々な人々と共に大浦の未来について考えてきた。真剣に考え、発信する子ども達の姿は、人々の心を大きく動かした。豊かな発想を繰り出す子どもと大人(教職員・保護者・地域・専門家)との協働的な学びによって、ふるさと大浦を愛し誇りに思う児童が増え、同時に大人も持続可能な社会づくりを真剣に考え始めた。また、地域でのインタビューから始まった未来学コンサートや海の恵みと地域の魅力が詰まった大浦定食の提案は、地域に生きる一人としての子ども達の思いが原動力となってきた。本校は、今後も人々とのつながりをとおして、子ども達が未来の大浦を創る希望となっていくことを支えていく。

パイオニアスクールプログラムを活用した阪南に根ざす海洋教育

石原 慎・林 江美
(阪南市教育委員会)

1. 市の海洋教育の取組み

本市の海洋教育は、学校現場の少数の先生たちの主体的な教育実践から始まり、NPO 団体や市の漁協関係者など、多くの方々のご協力を得て発展してきた。さらに、2018 年に本市を会場として開催された「全国アマモサミット」を契機として、「海洋教育パイオニアスクールプログラム」を活用し、市として海洋教育に取り組み始めた。

当初は、小学校 3 校がアマモの栽培活動を中心に NPO 団体の支援を受けながら取組みを進め、子どもたちは、近くにありながらなかなか体験することができなかった海での活動を通して、市の豊かな自然について学ぶことができた。

市としての取組みをスタートした海洋教育が、地域に根付いたものとなるためには、実施校を増やしながらか活動の幅を広げるとともに、それぞれの学校で持続可能な取組みとしていくことが不可欠である。

2. 取組みを広げ、継続していくために

海洋教育を持続可能なものとしていくためには、実施校が無理なく活動を行えるようにすることや、どの教員でも取り組めるようにしていく必要がある。そのために、海での活動に固執するのではなく、学校の立地を活かし、山に近い学校は山を、川に近い学校は川を活用し、山、里、川はすべて海につながっているということを意識した各校独自の海洋教育のプログラム開発を進めている。全学年が系統立ててそのプログラムの活動を行うことができるような年間計画の作成も行っている。さらに、学校が自走して取組みを行えるように、海洋教育の実践指導を学ぶ海洋教育研修会を毎年開催している。そこでは、教員自身が阪南の海の下さを知り、その海での活動を楽しめる機会にもしている。

また、海洋教育副読本「はんなんのうみ」を活用しての授業実践や、令和 4 年度に作成した「はんなん海洋リテラシー」において示している、子どもたちに育みたい力や発達段階に応じた育成目標を基にした実践も進めているところである。

3. 社会教育への広がりをめざして

今年度より、市内の小学校全校がパイオニアスクールプログラムの実施校となるまで取組みが広がってきている。「SDGs 未来都市」にも選定されている本市が、海洋教育をさらに発展させ、SDGs の理念を踏まえた取組みとするために、学校教育のみならず、社会教育としても地域に根付かせる必要があると考えている。そのために、今年度に「(仮称)はんなん海の学校」を創設し、若年層の市民を中心にさらに広範な人の手で海洋教育を進めていくこととしている。市、学校、地域、団体等が連携を深め、阪南市の海洋教育を益々発展したものとしていきたい。



写真 1：海での活動の様子

地域の宝ラムサール条約指定の「漫湖」を活かした海洋教育 ～故郷の「漫湖」を知り、愛し、持続させていくためにできることを考え実行する活動～

松原 康平・赤嶺 智郎
(沖縄県豊見城市立とよみ小学校)

1 本校の「海洋教育実践」

沖縄には、重要な湿地として「ラムサール条約」に登録されている場所が5箇所あります。慶良間海域、久米島の湿地、名蔵アンパル(石垣島)、与那覇湾(宮古島)、漫湖です。本校校区にある「漫湖」は、他の場所が離島で自然豊かな場所なのに対し、那覇市と豊見城市にまたがる都会の中の湿地であるのが特徴です。しかし、クロツラヘラサギなど200種の水鳥や干潟一面のカニ類など様々な生き物が観察できます。また、その環境を活かし環境省等が運営する「漫湖水鳥・湿地センター」があり、漫湖を体験的に学ぶことも出来ます。



写真1：都会の中の湿地帯「漫湖」

また、漫湖は1600年代の中国資料にも登場する歴史ある港でもあり、琉球(沖縄)に中国から文化が入ってくる重要な場所でした。そして、沖縄各地で現在も行われている、航海の安全や豊漁を祈願しての競漕「ハーリー」が、ここ漫湖が発祥地と言われています。

以上のことから本校では「漫湖」の自然、海洋文化を校区にあるという立地条件をいかし、3年生では漫湖の自然のすばらしさを実感できる学習を行います。4年生では漫湖での漂流ゴミの学習から、環境の持続のために自分たちができることを学びます。高学年では豊見城市ハーリー大会に参加し「ハーリー」のことを体験的に学んでいきます。これらの学習から漫湖の素晴らしさを知り、愛着をもたせ、この自然環境を持続させようと行動できる児童の育成を目指します。そして、その地域の宝「漫湖」での学びをデジタル機器等も活用しながら、身近な地域や社会へ発信していく「海洋教育」を実践しています。

2 実践してみて良かったこと

- ・児童そして教師も地域にある「漫湖」の価値に気づき、愛着と誇りが高まった。
- ・学年で実施している「海洋教育」に繋がりができた。

3 実践する上での課題

- ・学校全体として「海洋教育」をすすめていく合意を形成すること。
- ・「漫湖」を活用した体験学習を行うときに、教師に知識や経験がないこと。
- ・今まで行われていた総合的な学習から、教科横断的にカリキュラムマネジメントしていくこと。



写真2：豊見城市発祥のハーリー

4 課題解決のために試みたこと

- ・「海洋教育」の魅力と、児童の資質能力向上について職員と共通理解、そしてまずは実践を！
- ・教科横断的にカリキュラムマネジメントしていくための年間計画の見直し、専門家の活用。

海遊館の学校対象学習プログラム紹介

いのちに出会う旅が始まる。海遊館は世界最大級の水族館です。生き生きした姿を見せる生き物たちを通して、自然と生命の尊さ、不思議さが学べ、みなさまの知的好奇心をかきたて、特別な時間と体験を提供します。



海遊館オンラインアカデミー

『ジンベエザメ』をテーマとした、約45分のオンライン学習プログラムです。海遊館と教室、飼育員と生徒をつなぎ、ジンベエザメのLIVE映像やクイズを交えながら学習できるプログラムで、飼育員にも直接質問ができます。また、人と環境との関わり(SDGs)を含む内容となっているため、校外学習時の事前・事後学習や探求学習、総合学習のみでも活用できます。

日程：平日のみ(午前1枠、午後1枠どちらかをお選びいただけます)

料金：1名200円(50名以下の場合、定額10,000円となります。)

対象：小学生中学年レベル(他の学年をご希望の際はお問い合わせください)

配信：Zoom 100名以下、Teams 300名以下



海遊館アカデミー 各学年にマッチした学習プログラム

入館前後に受講できる30分間の学習プログラムです。

「ジンベエザメってなにを食べているの?」「飼育員ってどんな仕事をしているの?」など、現役飼育員による講座形式で、見るだけでは分からない生き物の魅力や海遊館の面白さをお伝えします。

日程：平日(休館日は除く)※詳しい日程や空き状況はお問い合わせください

料金：1名200円※特別割引対象外※学校団体教員は無料

対象：海遊館に入館する20名以上の学校団体(幼児～高校生)

テーマ：(1)ジンベエザメ、(2)海遊館の動物たち、(3)飼育員の仕事

学校団体基本情報

平日9:00~10:00に学校団体専用枠を設けております。午前中の特別な時間帯を学校団体様のみでご利用いただけます。予約枠に制限がありますので、早目にお申込みください。上記の学校団体専用枠以外の時間も団体予約を承っております。

学校団体専用 特設サイト

<https://www.kaiyukan.com/info/group/detail/>

海遊館 団体受付

検索



森と田んぼの緑と、海と空の青を全身に実感できる 美しく生命豊かなこの季節に、ここ海遊館で2023年度“海洋教育研究会”が開催されることを心より嬉しく思います。

海遊館と言えば、ジンベエザメの展示で知られることが多いのですが、展示テーマは「Ring of Fire」。太平洋を取り囲む環太平洋火山帯の活動は、長い年月を経て各地に特徴的な地形や環境を造り出し、地域ごとにユニークな生命を育むという環境と生命のストーリーです。

もう少し視点を広げますと、海遊館のコンセプト「地球とそこに棲むすべてのものはつながっている」という想像力と創造力を、私たち人間の暮らしを含めてイメージでき、日々の暮らしのなかで感じていただけるように、様々な普及交流活動に工夫をしているところです。コロナ禍を経験した私たちにとって、ようやく対面式で開催される今回の“海洋研究会”は、新しいつながりの場となり、この海を地球を将来の世代に届ける一助となるに違いありません。

海遊館 館長 村上 寛之





2023 年度 海洋教育研究会 要旨集

2023 年 7 月 28 日

於 海遊館ホール・オンライン(ハイブリッド開催)

海洋教育パイオニアスクールプログラム事務局

[▶ spf.org/pioneerschool/](https://spf.org/pioneerschool/)

公益財団法人 笹川平和財団 海洋政策研究所

[▶ spf.org/opri/](https://spf.org/opri/)